

書評

金柄憲（キム・ビョンホン）著 『赤い水曜日—慰安婦運動30年の嘘』

松木 國俊（朝鮮近現代史研究所所長）

2021年8月14日、慰安婦問題の本質を暴露する注目すべき書籍が韓国で刊行され、その日本語版がこの度発売された。『赤い水曜日』（金柄憲著・文藝春秋）である。私も長年慰安婦問題に取り組んで来たが、本書を読み進めるにつれて、齒に衣を着せぬ痛烈な筆致で「慰安婦強制連行」肯定派の「嘘」をことごとく論破する展開に、はたと膝を打ち、溜飲を下げることもしばしばであった。

著者の金柄憲氏は、成均館大学漢文学科博士課程を修了した韓国史の専門家である。独立記念館専門委員などを歴任し、現在は韓国史教科書研究所の所長を務めている。

彼は元慰安婦と称する人々とその支持団体の主張があまりにも事実を歪曲していることに義憤を覚え、2019年12月に元慰安婦をめぐるさまざまな「嘘」を告発する記者会見を行った。

以来、正義連（旧挺身隊問題対策協議会）が日本大使館敷地正面で開く「慰安婦を称える水曜デモ」に対抗して、同じ場所で「反慰安婦団体デモ」を敢行し、慰安婦問題の虚構を訴え続けて来た。同様の活動を彼は韓国全土で繰り広げており、2020年6月末には仲間と共にドイツのベルリンまで飛んだ。そこで彼は自区内に慰安婦像設置を許可したミッテ区議会に抗議し、設置された慰安婦像の前で「強制連行の嘘」をベルリン市民に訴えかけている。

慰安婦を「神聖」視する韓国社会においては、身辺に危険が及ぶほどの反発を覚悟しなければ出来ない行為であり、既に彼は元慰安婦支援者から「元慰安婦の名誉を棄損している」などの理由で幾つもの裁判を起こされている。だが彼は全く怯まず、『赤い水曜日』を上梓して、自己の信念を堂々と世に問っているのだ。

なぜ金柄憲氏はそれほどまでに慰安婦問題にこだわるのか。2022年11月16日に東京で行われた「慰安婦問題を巡る日韓合同シンポジウム」参加のために来日した彼に、同シンポジウムのコメンテーターを務めた私は聞いた。彼はそれにこう答えた。「これほどの嘘がまかり通る韓国に未来はないからです」

その微笑みを絶やさぬ柔和な表情の奥に、彼の確固たる信念と沸々とたぎる闘志を私は垣間見ることができた。

ではここで『赤い水曜日』のさわりを紹介しよう。本書は第一部で元慰安婦の証言の「嘘」を徹底的に暴くことから始まる。アメリカ連邦議会や欧州の議会で演説し、トランプ大統領訪韓時に抱き着きパフォーマンスを見せて有名となった李容洙（イ・ヨンス）氏や、韓国で初めて「元慰安婦」としてカミングアウトした金学順（キム・ハクスン）などの証言が、その時々で全く異なることを具体的に示し、元慰安婦と称する女性たちの証言には全く

信憑性がないことを証明する。

元慰安婦たちは「慰安婦被害者法」に基づき補償金を受け取っているが、同法は補償金支払い対象者を「日帝によって強制的に動員され、性的虐待を受け、慰安婦生活を強要された被害者」と規定している。著者の金柄憲氏は軍人が民間女性を誘引、誘惑、拉致して慰安所に監禁し、売春を強要するなど死刑に相当する重大な軍紀違反であること、不法な海外渡航を防ぐために渡航手続きも厳重であったことなどを指摘し、実際に「慰安婦被害者法」に規定された被害者は一人も存在しない、と断じている。

著者は元慰安婦の補償金不正受給を追及するために、情報公開法に基づいて政府機関に対し、李容洙氏らが強制動員された日時と場所や動員の過程に関する情報の公開を要請した。だが回答はいずれも「情報公開法の規定により非公開」であった。「補助金管理に関する法律違反」で警察署にも告発したが、結果は「正当な手続きを踏んで被害者に登録された」として不起訴となっている。しかし実際は書類審査だけで登録されており、中には孫が祖母の「寝言」を根拠に申請し、認められたものすらあったという。

著者は監査院にも対象者選定に関わる監査請求を行ったが、韓国の裁判所が慰安婦問題を巡って下した判決（後述）及び河野談話を根拠に、「支援対象者の選定に問題はなかった」として請求は棄却された。河野談話によって日本は「慰安婦強制連行」を公式に認めたというのが韓国で定説と化しており、著者は「日本が河野談話を撤回しなければ問題は解決しない」と、ここで日本政府に強く警告している。

本書第二部では、慰安婦裁判をめぐる韓国裁判所の判決がいかにもデタラメであるかを暴露する。2021年1月8日にソウル中央地裁が「日本政府の主権免除は適用されない」として日本政府に元慰安婦への謝罪と賠償を命じた判決文には、日本が慰安婦にするために次のような方式で女性を強制動員したとある。①女性を暴行、脅迫、拉致して動員。②地域の有力者、公務員、学校の先生などを通して募集。③就職させる、お金をたくさん稼げると騙して募集する。④募集者に委託して募集。⑤勤労挺身隊、供出制度を通して動員。

さらに判決文には「慰安婦が逃走すれば、日本軍が追跡して連れ戻し、射殺することもあった」との記述まである。甚だしい事実誤認に基づく、不当な判決である。

著者は日本で発令された「女子挺身勤労令」は朝鮮半島では発動されておらず、朝鮮で女性を動員した事実はない点をまず強調し、④以外は全て犯罪であり、当時の日本の法律や渡航手続きなどを挙げ、政府が進んでこのような犯行を犯すはずがなく、まして慰安婦を射殺するなど考える方がおかしい、と判決文を厳しく指弾している。

続いて著者は2021年4月21日のソウル中央地裁の判決についても酷評する。この裁判も前述の裁判と同様に元慰安婦と遺族が日本政府を訴えたものであるが、結果は「主権免除」が適用されて棄却された。但しその判決文には1月8日の判決と同じ「日本政府の蛮行」が謳われており、日本軍の慰安婦数について「20万人でその80%は朝鮮人女性だった」と記してある。著者は当時海外に展開していた日本軍兵士の数は約300万人であり、もし20万人の慰安婦が一人一日20人以上相手をさせられたなら（元慰安婦の多くは一日20～40人の相手をさせられたと証言している）、一日400万人の日本兵が交渉を持ったことになる。これでは戦争どころではないと、裁判官の無知さ加減に著者は心底憤慨している。

また著者は1996年にクマラスワミが国連特別報告官として国連に提出した慰安婦問題

に関する報告書も取り上げ、その極端な歴史の捏造を批判する。

報告書によれば、北朝鮮側が用意した元慰安婦チョンオクスンは「いうことを聞かない慰安婦は釘を突き立てた鉄板の上を転がされて血みどろになって絶命し、首を切って他の慰安婦に食べろといった」と証言したという。

黄ソギュンの「反抗した少女を庭に連れて行って首をきり、胴体を切り刻んだ」という証言もある。このような猟奇的ホラ話をクマラスワミは事実として報告書に記載し、これが真実となって世界に出回っている。そして女性家族省、正義連、慰安婦援護者たちは、このクマラスワミ報告書及び河野談話を普遍の真理として、慰安婦問題の真実を語る者たちを攻撃する武器に使っていると著者は指摘し、一刻も早く河野談話と共にクマラスワミ報告書も撤回されるべきであると訴える。

著者は韓国の歴史教科書の歴史歪曲についても本書で言及している。2019年から使用されている小学校『社会』5-2には「女性たちは日本軍慰安婦として戦場に引っ張られて行き、酷い苦痛を受けた」とあり、高等学校の教科書（東亜出版）には「被害者たちは殴打や拷問、性暴力などで、一生治癒し難い苦痛の中で生きなければならず、一部は反人倫的犯罪を隠蔽しようとする日本軍に虐殺されたりもした」との記述がある。河野談話も「強制の証拠」として登場しており、河野氏と元慰安婦の写真を並べて対話式で構成されたものまである。

著者によれば、小中高等学校用教科書のどれをとっても、日本への憎悪を植え付けるための「嘘」が刺激的な表現で並んでおり、これを読む子供たちへの「情緒的虐待」とも言えるレベルにあるという。

私は著者より韓国の教科書を借りて1990年代の教科書と比較してみたが、日本の残虐性をより一層強調する内容に変わっていた。どの教科書も中身の半分近くが「日本の残忍な朝鮮支配」への恨み言であり、韓国の子供たちは幼いころから「嘘」を刷り込まれ、骨の髄まで日本への恨みと憎しみで凝り固まった大人へと成長する仕組みになっているのだ。

本書第三部及び第四部では慰安婦問題の本質を明らかにしている。2016年にはソウル南山の中腹に「記憶の地」という慰安婦を称える公共施設が開設された。ここでは247人の元慰安婦の名前が石碑に刻まれている。2017年には8月14日が「日本軍慰安婦被害者を称える日」として、国の公式記念日となった。

著者は「彼女たちはこれから千年も万年も恥をさらすことになる」と元慰安婦たちへの憐憫の情を吐露し、正義連も政府機関である女性家族省も元慰安婦の気持ちなど歯牙にもかけず、ひたすら自分たちの業績や利益のために彼女たちを利用してると糾弾する。

長年元慰安婦支援運動を主導してきた尹美香は、2016年に刊行した『25年間の水曜日』の中で、日本軍によって強制連行された慰安婦たちは軍人から殴打と強姦、性的暴行、拷問、人工流産、不妊手術、子宮摘出などありとあらゆる虐待を受け、利用価値がなくなると銃殺されたと書いている。だがそれらの全てが虚偽であることを本書が立証しており、尹美香ら活動家の目的が、元慰安婦を食物にしつつ、事実を歪曲・捏造して老若男女に日本に対する恨みを植え付け、社会的分裂と日韓の離反を煽ることにあるという著者の指摘に、日本側は最大限留意すべきである。

著者は誰もが納得できる論証方法により、慰安婦問題の本質をあぶり出して行く。韓国では「慰安婦被害者」の責任をすべて日本に押し付けているが、ならば終戦と共に韓国

で売春業がなくなったのか。戦後も同じ職業に従事する女性は少なくなかった。多くの米軍慰安婦もいた。結局日本軍慰安婦問題は「戦争と暴力の歴史」ではなく、「無能な朝鮮」「貧しい父母」の犠牲になった多くの女性たちが、お金のために身を売ったということなのだ。もし何らの対価もなしに娘を連れて行かれたら、たちまち朝鮮中で暴動が起きたはずではないか。

そして著者は、慰安婦問題の本質は貧しさのために発生した、悲しくも恥ずかしい自画像であると断定し、他国に責任を押し付けるべきものではないと断言する。

さらに、韓国自身がそのような問題の本質を直視して正しい解決方法を探さねばならない。「被害者」が存在しない「慰安婦被害者法」など破棄し、自国で慰安婦問題を解決することが韓国人の自尊心を守る道なのだ、と著者は確信を持って説いている。

前述のシンポジウムにおいても、彼は「慰安婦問題は全て虚構であり、『嘘』がまかりとおる韓国に未来はない」と憂国の情を語り、「慰安婦問題を解決する方法はただ一つ。それは真実を全ての人々に知ってもらうことだ」と強く主張した。

だが日本は真実をないがしろにしたまま、河野談話を発表するなど安易に謝罪を繰り返してきた。それは「強制連行があった」と韓国側に誤解させ、韓国の裁判所の不当な判決や国連のクマラスワミ報告書に繋がり、世界中で日本が貶められる結果を招いてしまった。

このまま日韓が互いに反目を続ければ、経済ばかりか安全保障面でも両国に甚大な悪影響を及ぼすだろう。中国や北朝鮮の軍事的脅威の下で、日韓が共倒れとなる公算すらある。著者は韓国を愛するがゆえに、運命共同体である日本との関係が破局に至ることを危惧し、韓国人の自尊心を貫いて慰安婦問題の真実を世界に訴えているのだ。

日本政府も目先の葛藤を恐れずに河野談話を早急に撤回し、国連などあらゆる外交の場で「日本の官憲による強制連行は一切なかった」と、きっちり史実に踏み込んだ反論を展開すべきである。韓国の歴史歪曲を正面から論破してこそ、反日教育で韓国人の胸に刺さった「恨みのトゲ」を根っこから抜き去り、日本人の名誉と誇りを守ることが出来るからだ。

この『赤い水曜日』には、過去の真実が生き生きと記述されている。日本兵を愛した元慰安婦の証言も数多く収録されている。日韓和解を達成するために、本書は両国民にとって必読の書である。反日の嵐の中でこれだけの本を出版するには、固い信念と勇気がなければならない。身の危険をも顧みず、日韓共栄の為に戦う著者の金柄憲氏に、日本人として心からエールを送りたい。

(文藝春秋、2022年刊)